

(4) 善悪の判断の拠り所

モラル意識を形成する上で何を基準にするかは、人によって違うのだろうか。

父親、母親、友人、世間、法律、信仰、自分の良心の七項目について、それぞれ善悪の判断を下す際に拠り所とするか否かを尋ねた結果、特に多くの人々が拠り所としていたのは「良心」99.4%、「法律」(90.4%)などであった。大半の人々は親や世間などといった「他者の目」よりも、自己の内的基準や、法律、規則などの客観的な基準を重視する傾向がある。かつて日本人のモラルの中核とされていた「恥」の観念は、「他者の目」を意識することから生じるものであり、上記の結果は、「恥」意識の希薄化が懸念されている現代社会の風潮を裏づけるものと解釈しうる。

他者の目の中で比較的多くの人々が拠り所としていたのは、世間一般や年長者ではなく、「友人・同僚」(80.2%)という同世代の仲間集団である。一方判断の拠り所とされにくいのは、「信仰」(29.2%)、「世間」(63.1%)などであった。

男女別に見ると、すべて項目で女性の方が肯定的回答をする傾向が高い。特に「母親」「友人」「信仰」では、5ポイントを超える大きな差が見られ、女性は善悪の判断に際し、自己の内的基準や法律などの客観的基準に加え、親しい間柄の他者や信仰などといった精神的な拠り所に依存する度合いが高い傾向がある。

年代毎の回答傾向にはかなりばらつきが見られ、一貫した傾向を読み取ることはできなかった。

2. 責任感

(1) 責任感の変化についての意識

世間一般について、責任感がない人が増えていると感じているか、責任感のある人が増えていると感じているのかどちらだろう。

「選択肢のなかから、あなたの意見に近いものを選んでください」として責任感についての社会的変化の感じ方を「最近責任感のない人が増えている」「昔も今も責任感にはあまり変化がない」「昔よりも責任感のある人が増えている」の三つの選択肢から一つを選んでもらった結果を表A-2-1に示した。

表A-2-1 責任感の社会的変化について

	ない人が増えている	変化がない	ある人が増えている
男性	76.8	22.9	0.3
女性	81.1	18.3	0.6
全体	79.0	20.6	0.5
男性年代別			
20～29歳	70.1	28.6	1.3
30～39	80.0	20.0	0.0
40～49	81.1	18.9	0.0
50～59	79.0	21.0	0.0
60～69	73.2	26.8	0.0
女性年代別			
20～29歳	75.0	23.6	1.4
30～39	84.6	15.4	0.0
40～49	82.9	17.1	0.0
50～59	84.6	14.1	1.3
60～69	75.7	24.3	0.0
職業別			
事務技術系勤め人	77.2	22.2	0.6
販売労務サービス系勤め人	60.0	40.0	0.0
管理職	76.6	23.4	0.0
商工自営・自由業	86.5	13.5	0.0
公務員	90.0	10.0	0.0
専業主婦	81.8	18.2	0.0
パート・アルバイト	85.7	11.4	2.9
学生	68.9	31.1	0.0
無職	73.5	26.5	0.0
その他	87.9	12.1	0.0

全体ではほぼ8割が「最近責任感のない人が増えている」と感じ、変化を感じていない人は2割程度と少ない。また「昔よりも責任感のある人が増えている」という感じ方をしている人はごくわずかで1%にも満たない。

責任感がある人の増減について、性別による顕著な違いはみられないが、年代による感じ方の違いが若干見られる。30代、40代、50代の方が、最近の人々の責任感のなさについて厳しい見方をしている。20代と60代の方が「変化なし」と感じる率が10ポイント多い。

経年比較の視点をもちにくい20代の若者の回答に「変化なし」が多いことは容易に予測できたが60代にも多い点は予想を外れた。歳を経るほど今の社会の責任感について厳しくなるわけではなく、むしろ最近の「責任感のなさ」に敏感なのは現役世代である。この傾向は男女共に共通してみられる。

責任感の変化への敏感さは職業によっても若干違いがみられる。「最近責任感のない人が増えている」の比率が最も高いのは「公務員」(90%)、「その他の職業」(87.9%)、「商工自営・自由業」(86.5%)、「パート・アルバイト」(85.7%)、「専業主婦」(81.8%)と続く。逆に比率が低いのは「販売・労務・サービス系勤め人」(60.0%)、「学生」(68.9%)である(表A-2-1参照)。

責任感に関する社会観と、パーソナリティとの関連をみよう(表A-2-2参照)。

表A-2-2 パーソナリティと責任感の社会的変化

	責任感のない人増加	変化なし
自己満足度得点		
高群	81.9	18.1
中群	79.3	20.7
低群	77.4	22.6
自信度得点		
高群	78.3	21.7
中群	78.6	21.4
低群	82.9	17.1
共感性得点		
高群	81.2	18.8
中群	83.1	16.9
低群	75.0	25.0

「自己満足度」「自信度」「共感性」について3段階(それぞれ高位群、中位群、低位群)に分け、責任感についての感じ方とクロスさせた。統計的な有意差が認められるのは、共感性との関係である。ただし、共感性と責任感の社会的変化に関する意識にリニアな関係が認められるわけではなく、共感性が低いグループで「変化なし」が多いという点が特徴的なことである。

(2)自己の責任感

前項で述べたように、社会的属性やパーソナリティとはあまり関係なく、大半の人が「最近責任感のない人が増えている」と感じていることがわかった。次に、自分自身の責任感についてはどんな評価をしているかをみよう。

自分自身の責任感について「責任感がある方だ」「責任感は普通程度だ」「責任感がない方だ」の3つの選択肢から回答を求めた(表A-2-3参照)。

表A-2-3 自分自身の責任感

	責任感がある方	普通程度	責任感がない方
男性	50.8	47.3	1.9
女性	57.6	40.5	1.8
全体	54.3	43.9	1.9
男性年代別			
20～29歳	42.9	51.9	5.2
30～39	47.7	52.3	0
40～49	47.3	50.0	2.7
50～59	64.5	35.5	0
60～69	56.1	43.9	0
女性年代別			
20～29歳	50.0	45.8	4.2
30～39	52.3	46.2	1.5
40～49	55.3	44.7	0
50～59	62.8	34.6	2.6
60～69	75.7	24.3	0
職業別			
事務技術系勤め人	49.4	49.4	1.3
売労務サービス系勤め	52.5	42.5	5
管理職	66.0	34.0	0
商工自営・自由業	69.2	30.8	0
公務員	50.0	50.0	0
専業主婦	52.0	47.3	0.7
パート・アルバイト	51.4	45.7	2.9
学生	42.2	46.7	11.1
無職	67.6	32.4	0
その他	60.6	39.4	0

全体では、「責任感がある方だ」が半数を超え（54.3%）、「責任感普通程度だ」がやや少なく（43.9%）、「責任感がない方だ」はごく少ない（1.9%）。

性差が多少あり、女性の方が男性より「責任感がある方だ」という回答が多く、「責任感普通程度だ」が少ない。ただし、「責任感がない方だ」には差がみられず、男女共2%にみたない。

年代があがるにつれて「責任感がある方だ」が増加している。この傾向は女性においてとりわけ顕著であり、20代と60代では25ポイントの開きがある。男性の場合は女性とは様相が異なり、「責任感がある方だ」がもっとも多いのが50代（64.5%）である。少数ではあるが「責任感がない方だ」が多少目立つのは男女とも20代である。

職業別にもかなりの違いがある。「責任感がある方だ」が7割に近いのは「商工自営・自由業」「無職」「管理職」である。一方「事務系・技術系勤め人」「販売・労務・サー

ビス系勤め人」「公務員」「パート・アルバイト」「専業主婦」では半数程度であり、「学生」では半数をかなり下回る。学生の場合「責任感がない方だ」が1割を超えている。

表A-2-4 自分自身の責任感とパーソナリティ

	自己責任感あり	自己責任感普通
自己満足度得点		
高群	68.5	31.5
中群	55.1	44.9
低群	45.5	54.5
自信度得点		
高群	68.0	32.0
中群	39.7	60.3
低群	51.2	48.8
共感性得点		
高群	60.5	39.5
中群	60.1	39.9
低群	47.6	52.4

自己の責任感とパーソナリティ特性の関係をみると、自己満足度得点が高いグループの方が自己責任感も高いという関係がみられる。その他のパーソナリティ特性との関係は明確ではない（表A-2-4参照）。

責任感についての社会変化の認識と、自己責任感の関係をみると、「最近責任感のない人が増えている」と感じている人は自分が「責任感がある方だ」と意識し、「あまり変化がない」と感じている人は「責任感は普通程度」と感じているという関係がみられる。責任感ありとの自覚をもつ人ほど、他者の責任感について厳しい見方をしやすく、責任感をもつ人が減った社会だと認識しやすいといということである。

(3)戦争責任について

戦争責任についての受け止め方は歴史認識の問題として議論されることが多いが、責任感という点でみるとどうなのか。戦争責任についての意識が(1)、(2)でみてきたような責任意識とどう関連しているかをみることにした。質問文は「戦争責任についてはさまざまな考え方があります。太平洋戦争中に日本軍が行った行為についてあなた自身が責任を感じることがありますか」とし、回答は「ほとんど感じない」「あまり感じない」「少し感じる」「かなり感じる」の4段階とした。

戦争責任の感じ方には、回答者全体にかなりばらつきがある。

表A-2-5 戦争責任

	責任を感じない	責任を感じる
男性	67.1	32.9
女性	66.2	33.8
全体	66.6	33.4
男性年代別		
20～29歳	81.8	18.2
30～39	75.4	24.6
40～49	67.6	32.4
50～59	56.5	43.5
60～69	41.5	58.5
女性年代別		
20～29歳	70.8	29.2
30～39	78.5	21.5
40～49	72.4	27.6
50～59	51.3	48.7
60～69	54.1	45.9
職業別		
事務技術系勤め人	74.7	25.3
売労働サービス系勤め	72.5	27.5
管理職	57.4	42.6
商工自営・自由業	57.7	42.3
公務員	80.0	20.0
専業主婦	65.5	34.5
パート・アルバイト	70.0	30.0
学生	68.9	31.1
無職	47.1	52.9
その他	54.5	45.5

「ほとんど感じない」「あまり感じない」を戦争責任を「感じない」グループとし、「少し感じる」「感じる」を戦争責任を「感じる」グループとすると、責任感をもたない人ともつ人の比率はおよそ7対3（66.6%：33.4%）である。全体的には顕著な性差はない。年代差が大きく、年代があがるにつれて戦争責任を「感じる」率が高くなる（表A-2-5参照）。

性・年代別の比較では、他と比べ20代・60代で顕著な差がみられる。20代では、男性の方が戦争責任を「感じない」者が多く（10ポイント差）、60代では女性の方が「感じない」者が多い（約13ポイントの差）。男性の場合は年代ごとに約10ポイントずつ変化しているが、女性の場合は40代から50代で一挙に20ポイントの違いが出て

いる点に特徴がある。

職業別でも、かなり傾向が違う。戦争責任を「感じない」率が顕著に高いのは、「公務員」（80.0%）、「事務系・技術系勤め人」（74.7%）、「販売・労務・サービス系勤め人」（72.5%）、「パート・アルバイト」（70.0%）である。ただし、これには年代による効果が反映していると思われる。

自己責任感と戦争責任に有意な関係がある（表A-2-6参照）。

表A-2-6 自己責任感と戦争責任意識

	戦争責任を感じる	戦争責任を感じない
自己責任感あり	35.9	64.1
自己責任感普通	30.3	69.7

自己責任感のある人の方が戦争責任も感じている。

また世間一般の責任感の変化についての意識と、戦争責任意識の間にも、関連性が見られる。

表A-2-7 戦争責任と責任感の社会的変化

	戦争責任を感じる	戦争責任を感じない
責任感のない人が増加	35.1	65.2
変化なし	27.0	73.0

表A-2-7にみるように、「責任感のない人が増加している」と感じている人の方が、戦争に責任感をもつ率が若干高く、「昔も今も責任感にはあまり変化がない」とみている人の方が、戦争責任を感じる率が低いという関係がみられる。

(4) 責任意識と警察の仕事ぶりへの評価

最近、警察官の不祥事が続き、警察の仕事ぶりについて、市民から厳しい批判が寄せられた。警察の責任体制の改革を求める市民の意見も多い。そこで調査では、人々が警察により大きな責任を求めることと、市民の責任感・責任意識にはどのような関係があるのかを調べることにした。

質問文は、「選択肢の中からあなたの意見に近いものを選んでください」とし、「警察の仕事ぶりについて」、「全体的によくなっている」「今も昔もあまり変化がない」「全体的に悪くなっている」のうちから1つを選択してもらった。

まず、警察の仕事ぶりへの評価を属性別にみたのが表A-2-8である。

表A-2-8 警察の仕事ぶりの変化

	よくなっている	変化なし	悪くなっている
男性	6.0	39.2	54.9
女性	6.7	41.5	51.8
全体	6.3	40.3	53.3
男性年代別			
20～29歳	0.0	45.5	54.5
30～39	4.6	38.5	56.9
40～49	4.1	32.4	63.5
50～59	6.5	45.2	48.4
60～69	22.0	31.7	46.3
女性年代別			
20～29歳	1.4	52.8	45.8
30～39	1.5	46.2	52.3
40～49	1.3	42.1	56.6
50～59	11.5	35.9	52.6
60～69	27.0	21.6	51.4

回答者全体では「全体的に悪くなっている」が過半数であり（53.3%）、「昔も今もあまり変化がない」は4割（40.3%）、「全体的によくなっている」はごく少数である（6.3%）。性別による評価の違いはみられず、年代差が大きい。男女共に、60代では「全体的によくなっている」の比率が2割を超え、とくに女性は3割近くに達している（男性22.0%、女性27.0%）。

警察の仕事ぶりの変化に関してもっとも厳しい評価をしているのは、男性の40代である（「全体的に悪くなっている」が63.5%）。女性も同様に40代の評価が一番厳しい（56.6%）。

職業別では、評価が厳しいのは「その他」「商工自営・自由業」「管理職」「パート・アルバイト」「公務員」である。ただし「無職」「商工自営・自由業」では「全体的によくなっている」という評価も他に比べて若干多く、評価が割れている。

警察の仕事ぶりへの評価とパーソナリティとの関係には特筆すべきものはない。

相関関係がみられるのは、責任感の社会的な変化についての意識である。「最近責任感のない人が増えている」と感じている人は、6割（60.8%）が「警察の仕事ぶりは全体的に悪くなっている」と答えているのにたいし、「昔も今も責任感にはあまり変化がない」と感じている人は4割（42.3%）しかそのように感じていない。

社会的に無責任な人が増えたという感じ方をする人ほど警察の仕事ぶりに関しても悪くなっていると感じており、しかもそれは年代的には働き盛りの現役世代に多い。退職者や

学生よりも現役で仕事をしている人たちがそのような意識をもっている。

3. 生活安全に向けた自己責任

生活の安全確保のためには、警察に期待するばかりではなく、自助努力も重要なポイントである。今回調査では、自分の財産や安全を守るために実際に実行している対策をたずねる項目を設定した。

質問文は「あなたは自分の財産や安全を守るため、次のようなことを心がけていますか」とし、「防犯ベルを携帯する」「玄関に複数の鍵をする」「留守にするときには近隣と声をかけあう」「電話やクレジットカードの番号を他人に知られないようにする」「民間の警備会社と契約する」5項目をあげ、「している」「していない」のどちらかを回答してもらったものである。

以下では各項目についての回答を、属性、パーソナリティ、責任意識との関係で分析する。

(1)生活安全のための自助努力と社会的属性

(a)防犯ベルの携帯

「防犯ベルの携帯」についてはほとんどの人が実行していない(表A-3-1)。性差もほとんどない。性別ごとの年代差をみると、わずかとはいえ実行しているのは女性の20代、男性の40代、50代である。男性の場合、職業上の必要から携帯している様子である。

表A-3-1 防犯ベルの携帯

	している	していない
男性	1.9	98.1
女性	1.5	98.5
全体	1.7	98.3

(b)玄関に複数の鍵をする

防犯ベルの携帯に比べると実行率が高いのは「玄関に複数の鍵をする」である(表A-3-2)。

表A-3-2 玄関に複数の鍵

	している	していない
男性	44.5	55.5
女性	48.2	51.8
全体	46.4	53.6

玄関の鍵を壊して進入する事件が続いており、施錠の重要性への認識が高まっているためであろう。全体の半数近くが実行しており、女性の実行率が若干高い（48.2%）。

年代別では20代は男女とも低い。男性の場合は30代、40代、60代が共に低いが、女性は30代、50代が共に46.2%、40代と60代はそれぞれ56.8%、56.6%と高い。子どものいる回答者の方が実行率が10ポイントほど高い。子どもがいると生活安全についての意識が高まりやすいということか。「防犯ベルの携帯」に関しては子どもの有無による違いはない。個人としての防犯意識よりも、家族を守るという形での防犯意識の方が強く出るとのことだろうか。

(c)近隣と声をかけあう

「近隣と声をかけ合う」には性差があり、女性（52.7%）が男性（44.2%）より実行率が高い（表A-3-3）。性差は若い年代に顕著である。若い男性は防犯について無関心であると共に、近隣とのコミュニケーションに無関心であるためかもしれない。その他は年代による差は少ない。年代差より子どもの有無による差が大きい。「子どもがいる」場合の実行率は53.0%だが「子どもがいない」回答者の実行率は10ポイント以上低い

（39.1%）。この結果からは子どもの有無によって近隣とのコミュニケーションのあり方が変化し、防犯についても、コミュニティを基盤とした活動がなされにくくなることが示唆される。

表A-3-3 近隣と声をかけあう

	している	していない
男性	44.2	55.8
女性	52.7	47.3
全体	48.5	51.3

(d)電話やクレジットカードの番号を他人に知られないようにする

5項目の中では、この項目の実行率が最も高く、全体で77.7%である（表A-3-4参

照)。しかし全体で2割強は実行していない。性差はないが、年代による違いがあり、男性では30代の実行率が高く(89.2%)、20代(71.4%)との差が大きい。女性は60代で飛び抜けて高い(89.2%)ほか年代差が小さい。子どもの有無による差は小さいが、職業によるばらつきがあり、「公務員」「管理職」が他より高い。

表A-3-4 電話・クレジットカード番号を知られないようにする

	している	していない
男性	77.7	22.3
女性	77.7	22.3
全体	77.7	22.3

(e)民間の警備会社と契約する

「民間の警備会社と契約する」は「防犯ベルの携帯」と同様、実行率がきわめて低かった(表A-3-5)。

表A-3-5 警備会社と契約

	している	していない
男性	1.6	98.4
女性	2.7	97.3
全体	2.2	97.8

(2)生活安全のための自助努力とパーソナリティ、責任意識

各人のパーソナリティ特性と生活安全のための自助努力はの関連性は小さい。

「玄関に複数の鍵をかける」について統計的に有意な差があると認められたのは、自己満足度と自信度である。自己満足度の低いグループでは玄関に複数の鍵をかけていない人が多く、自信のないグループも同様である。

「近隣と声をかけあう」ことが少ないのは、自己満足度の低いグループ、また共感性の低いグループである。また自分自身について「責任感のある方だ」と思っている人の方が「近隣と声をかけあう」ことが多い。

大都市のマンションなど集合住宅では、隣同士でもお互いが見知らぬままで生活が続けられる。生活時間の多様化がそれを促進している面もあるし、互いに干渉しないことを好むともいわれている。しかし、生活安全という側面からは、近隣の助け合いも見直されてよいだろう。ただし、近隣と声をかけあう関係を築くには、一定の自己評価や他者との共感性が不可欠である。自分の行動に責任をもつだけでなく、相手からの依頼を受け

た場合、責任をもって遂行するという互酬的関係が必要になる。近隣同志で互酬的関係が築きにくい背景に、責任の回避や自己満足意識の低さ、共感性の低下といった心理的な側面があることが示唆された。

「電話やクレジットカードの番号を知られないようにする」については共感性が高い人ほどそうした注意をはらっているという関係がみられた。

警察の仕事ぶりへの評価と生活安全の自助努力には統計的に有意な関係はみられなかった。警察への不信感が高まれば、自己防衛のための工夫を図るようになるかとも予測されるのであるが、そうはなっていない。最近警察の仕事ぶりへの評価を下げた人も、自己防衛が必要なほど生活安全が脅かされたとは感じていないということだろうか。